

杉原夷山宛田中光顕書翰紹介（続）

長 井 純 市

はじめに

ここに紹介する杉原夷山宛田中光顕書翰六五通は、前号に掲載したものの続編である。この書翰集の由来については、本誌前々号「田中光顕関係文書紹介（十三）（付）杉原夷山宛田中光顕書翰」および前号「田中光顕関係文書紹介（十三続）（付）杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」の「はじめに」を参照されたい。筆者が二〇一〇年一〇月から一一月にかけて福島県南会津町在住の史料所蔵者・杉原俊一氏を訪ね、許可を得て、田中光顕自筆書翰集の閲覧、撮影を終えたのち、再度同氏より追加書翰集に関するご連絡をいただき、翌二〇一一年一〇月から一一月にかけて同氏のもとを訪ね、閲覧、撮影したものである。

今回の書翰の時期は、大正七年一月から同一一年三月までである。すべての書翰が、夷山の扱っている江戸時代後半期の書画を購入あるいは返却するとの田中の意志を伝えたものである。田中の支払い最高金額は、第三九番書翰（大正八年九月二〇日付）に記されている一三〇円（吉田

松陰の遺墨）である。これ以外はほとんど一〇〇円以下におさまっている。

以下、主な書翰を紹介しよう。

第二四番書翰（大正八年五月二二日付）に記された「天龍道人」（坂部天龍、画家、肥前）、「鵬齋」（亀田鵬齋、儒学者、江戸）という人物について、田中は追贈の措置を講じてしかるべきであるとの判断を示している。かつて宮内大臣をつとめた田中は職務として追贈の事務処理を行った経験があり、その基準を念頭に置いて、こうした発言をしたのであろう。もし、それが実現すれば、作者である両人の名誉を高めることとなり、田中は歴史をつくることもなる。いうまでもなく、両人の作品の価値（売買価格を含む）は、それによって高まる。

今回紹介する書翰集に記述された書画の作者で、前回までに紹介されていない人物について、仮の分類（前号掲載と同じ分類）を行い、判明した限りにおいて、左に記す。人物に関する情報については、前号と同じ文献による。

勤王家

小原鉄心(美濃) 金子教孝(常陸) 勝野臺山(常陸)
 菊池教中(下野) 月照(京都) 茅根寒緑(常陸) 前
 原一誠(長門)

学者

大槻磐溪(陸奥) 亀田鵬齋(江戸) 菊池海蔵(海荘、
 紀伊) 黒沢翁満(伊勢) 古賀精里(京都) 坂谷朗蘆
 (阪谷朗蘆、備中) 佐久間象山(信濃) 佐藤一斎(江
 戸) 佐藤尚中(下総) 柴野栗山(讃岐) 高島秋帆
 (肥前) 立原翠軒(常陸) 中島棕隠(京都) 野中兼山
 (土佐) 林復斎(江戸) 細川善庵(江戸) 頼春水(山
 陽の父、安芸)

画家

王瑾(坂部天龍、天龍道人、肥前) 荻原春山(武威)
 草場佩川(肥前) 武井真激(信濃) 藤田呉江(越中)
 松岡環翠(伊勢) 渡辺華「壘」山(江戸) 高島式部(京
 都)

書家(詩歌)

秋月悌二郎(悌次郎、韋軒、陸奥) 足代弘訓(伊勢)
 江馬天江(近江) 大田南畝(江戸) 神波即山(尾張)
 菅茶山(備後) 菊池五山(讃岐) 篠崎小竹(摂津)
 細香女史(美濃) 館柳湾(越後) 藤井竹外(摂津)
 村瀬太乙(美濃) 原采蘋(筑前)

この他、旧幕臣として大島圭介(播磨)、川路敬斎(聖謨、豊後)、勝
 海舟(江戸)、鳥居甲斐守(耀蔵)、永井介堂(尚志、三河)、矢部定謙
 (江戸)の書画を、また旧大名として春岳(松平慶永、越前)の、さら

に旧藩士として広澤安任(会津藩)、五代友厚(薩摩藩)の書画を購入
 候補としてあげている。

田中が最も興味を示し、購入を望む書画が、幕末期の尊王攘夷の志士
 の遺墨であることは、変わらない。しかし、それ以外にも「勤王家」を
 中心とする学者などの作品を購入しており、田中の書画に関する関心は
 幅広く、その識見は深い。相変わらず、真贋の判定も厳しい。作品の価
 値評価と真贋判定の能力について、田中は自らを「天狗」と称し自慢し
 ている。

たとえば、第九番書翰(大正七年四月一三日付)には、村山半牧の作
 と称する贋物に夷山が真物との保証書を付けたとして、田中家の家宝と
 して「珍藏」するというからかいのことばが記されている。「猿も木よ
 り落ち、河童も川流の失策を免かれず。精鑑家の夷山先生にして如此事
 あり。吾曹小天狗聊あんする所ありと謂ふへし」というのが、長年つき
 あってきた田中の夷山に対する慰めであった。

また、前記第三九番書翰にも、吉田松陰の書の購入に関連して、「松
 陰は珍品、容易に手に入り不申もの也。正真無疑大慶不遇之候。小生
 今より五十五、六年以前に松陰の真筆の詩文稿を高杉東行より借り受け
 贍写せし事有之。十分筆意を呑み込み居候而今以毫も忘れ不申候。大天
 狗々々」などと記されている。

幕末期の志士の遺墨に対する関心が高いことについては、たとえば第
 一〇番書翰(大正七年九月七日付)にも「維新志士」の書画を希望する
 旨の記述にあらわれている。また、第二九番書翰(大正八年六月一八日
 付)には「杳所は出来も宜敷代価も廉に候得共愛国家とか勤王家とか申

程の人物に無之候。先書画家と申丈の事故此際見合せ申候」とある。つまり、作者が「憂国家」、「勤王家」であることが購入の優先順位を高くした条件であることが知られるのである。

第五三〇五番書翰（大正九年一月七日付、同一〇日付、同一二日付）には、佐佐木高行宛坂本龍馬書翰の購入に関する記述がある。坂本については、紹介を要しないであろう。田中は、この書翰の購入を強く望んだが、持ち主が田中の購入希望を知って、高額な値段をつけたようである。田中は、それを「欲張り」と非難して、いったんあきらめた。おそらく真贋判定のために、夷山に実物を送らせたのであろうが、それを「返上」と憤慨している。しかし、最終的にはこれを入手した。これは夷山の仲介役としての功績であろう。

その書翰とは、田中のこうした収集品の寄贈を受けている幕末と明治の博物館（茨城県大洗町）および早稲田大学図書館（東京都新宿区）が所蔵する合計四通の書翰のいずれかを指したものであろう。それらの書翰は左の通りである（以下は、宮地佐一郎編『龍馬の手紙』講談社、二〇〇三年、四四六―四五三頁、四五七―四五八頁に掲載された釈文と写真版とを照合したものである）。

慶応（3）年（9）月日付不明（幕末と明治の博物館所蔵）

唯今長府の尼將軍、監軍熊野直助及二人、わらわお供し押来りて、吾吾軍を戦はんとす。かふらやの音おひた「だ」しく、既に二階の手すりにおしかゝりたり。別に戦を期せし女軍未来、思ふに是は我がをこたるを待つて虚を突かんとの謀ならんか。先つ吾れ先々

の先を以て此方より使をはせ、或者自ら兵に將としておそふてとりことし来らんかとも思へり。將軍勇あり義あらは早く来りて一戦し、共にこゝろよきお致さん。先者卒報如此。謹言 龍

唯今

榎梓首

佐々木大將軍陳「陣」下

慶応（3）年（9）月日付不明（同右）

今日の挙や、あへて私しおいとむに非ざるなり。則天地神明の知る所なり。唯大人の病苦をなくさめん事を欲して也。相会する面々者、女隊にて者（此段尤も密なり）西川の二女及胡弓妓外一人。是又有名の一婦。其外下関の老婆。今日相会し次第（但四時迄の心積なれとも九つ時にも相成んか）使者さし出申候間、唯今より駕を命し且左右調度など御とりしらべ可被成。弊館に者彈薬大小の砲銃取そろへ在之、一度令し候得者諸將雲の如に相会、百万の兵馬、唯意の如くと奉存候。誠恐拜首

龍

慶応（3）年（9）月日付不明（同右）

参上仕候よし被仰聞候。然に私共にも唯今長府馬関在番（赤間関奉行）其余兩人計参居申候（但し、昨夜出崎仕候由也）。商会に取組度との事なり。何か御かまい無之事なれば御手書たまはり度。先上件申上候。謹言 則報 龍

佐々木先生左右

襟拝

最後に、凡例を記す。原則として、仮名は平仮名に統一し、漢字は現在のものに改めた。また適宜句読点を付し、段落を設けた。

慶応(3)年(9)月6日付(早稲田大学図書館所蔵)

御書拝見仕候。明日西役所え云々の由早々参上の筈に候得共、蒸

気船借入且手銃千^{〔マ〕}廷取入申候て早々出帆と決心仕候に付、通弁

者其外人数をそろへ異館へ参候所なり。今宵彼方より帰次第御旅

宿まで参上候。謹言

六日

襟拝

佐々木先生左右

中行社御中

東海道岩淵

田中光顕

〔別紙〕

一金 廿六円 林谷

一同 十八円 秋水

〆金四十四円

此処へ運賃として金参円相加へ置候間宜しく御頼申候也。合計金四拾

七円也。

〔封筒〕表、東京市麻布区森元町一ノ九、中行社御中。裏、静岡県

庵原郡富士川町岩淵、田中光顕、七年一月十五日。

【2】大正7年2月5日

文晁、静軒、淡窓、旭荘、瑞山之五幅只今到着、一覽仕候。文静淡旭之四幅は購入之事に可仕候。瑞山は真赤なる贗物に有之候。文字は勿

最初の三通は芸妓を交えた酒宴への誘いの書翰である。志士坂本の洒脱な一面を伝えている。最後の一通は蒸気船と武器の調達に関するものであり、坂本の志士としての行動、役割を伝えている。いずれも田中にとって幕末における坂本との関係を懐かしく思い出させる遺墨であったのであろう。

これら注文書としての書翰集を日本近代史研究においてどのように意味づけるかについては、すでに本誌前々号、前号の「はじめに」において記した。つまり、幕末維新の動乱に参加し、その後政治指導者となった人物たちの素養を知ることとなり、また彼らの幕末維新観を知ることともなり、それによって、彼らの政治理念や政治判断、さらに政治的人脈の基盤、背景を説明することにつながるのである。

論、印も不宜候。御参考之為め所藏之墨按一幅小品に候得共入御一覽

申候。文字は無之候得共印を能々御覽被下度候。菊之画はまったく画

工之手に成り候ものにも有之候。雅致少しも無之候。印も輪郭中へ旨く

納る様に刻し有之候。真物之方は輪外に刀勢の余りたる所等も有之候。

静軒之竹は謙遜して蘆を画くと題したる杯甚面白く存候。

天山其外之分相待居申候。着次第拜見何分の御返事速に可申上候。

此度之四幅悉皆表装を改め度候間何卒御取計はせ被下度候。表装は中

身より少し上等之方が展覧する時心持ちよく存候間普通以上に御願申

上候。

瑞山之墨梅は御留置之上十分御覽に而御返却被下度候。小生は数幅所

藏致居候処他を譲いたし僅に一、二幅に相成申候。真物に有之候は、

買入度存候。御注意置被下度候。別紙小切手差上候間乍御手数御受領

被下度候也。

七年二月五日

光頭

夷山老台座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町、中行社、杉原夷山先生侍曹。裏、

静岡県岩淵、田中光頭、七年二月五日。

携手御出懸け可被下候。愉奉待入候。

二月十七日

(花押) 拜行

夷山先醒研北

尊文大佳雖竹拙有此易佳文何憂其拙況画竹亦妙哉

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原夷山老台座下。

裏、東海道岩淵、田中光頭、七年二月廿日。

【4】大正7年3月4日

艸盧 桜老 耐軒

三幅只今到来一閱桜老を返進之外二幅は御譲り受け相願候。公美の自

画讀は至極面白く候。

叢談第四号

細香女史菊

同第六号

華山横物

山水

右之二幅一応拜見相願申候。其節阿堵物御示し被下度候。

七年三月四日

古谿叟

【3】大正7年2月20日

拜復 拙老不老壯閉口仕候。御稟依例一、二額鄙見取捨在公方寸僕不

関也。「題貴画」詩愚考可仕候。諸公皆々天狗に而いつれも瘦閣下連

中に御座候。僕独不能恐画行仲間はつれ慚々愧々ちと夜中にてても双賢

夷山老台研北

金三十六円半小切手封入仕候也。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原夷山様侍史。

裏、静岡県岩淵、田中光顕、七年三月四日。

【5】 大正7年3月5日

- 一 村山半牧 山水
- 一 藤田東湖 七絶
- 一 芙蓉画 広海歌
- 一 高島式部 画讃

右四幅相求申候間其他は御返し仕候。御手数之段深謝之至候。

七年三月五日

光顕

夷山老台座下

「封筒」表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様侍史。裏、

東海道岩淵、田中光顕、大正七年三月五日。

【6】 大正7年3月6日

昨日付之貴墨只今相達申候。

一 鉄塞士山水も亦同時に着。一 覧之処真物に可有之と存候間買取之事に仕候。代は一百廿八円。

- 一 栗山 五絶 四十六円
- 一 東湖 七絶 百廿五円
- 一 式部 画讃 四円
- 一 半牧 山水 四十八円
- 一 三百五十一円

右之五点購入仕候間別紙小切手封入差出申候。御落手被下度候。

- 一 溪琴 七律
- 一 天江 七絶
- 一 磐溪 七絶
- 一 広海歌芙蓉菊
- 一 海舟 一行物
- 一 精里 □「稍カ」卷
- 一 一誠 七絶
- 一 久我画幽眠讃
- 一 月照 和歌
- 一 真激 同
- 一 星巖 七絶
- 一 十一點

右は一先御返上仕候。

愚考

月照は小生の曾て見しものと大に相違あり。

真激は手紙と筆意頗る違へり。恐くは他の真激ならん。手紙は毛利公

爵家蔵の勤王諸士遺墨帖にあり。高説の如く近来の贋作は精妙にして

容易に弁別し難く御苦心之程御察申上候。

曾て徳富蘇峰氏の催せし時の維新志士正気集に多く載せられたれとも玉石

混淆を免かれず。又松下軍治が催せし時の明治記念帖も同様。又関新

吾が岡山にての明治記念写真帖には贋物甚夥し。肝腎の付け石とすべ

きものに不正品有之候。困却の至りなり。鉄石・奎堂杯は明治の初年

の

の

の

の

の

の

には沢山に真物有之候。五円も抛ては尤物を得られしに付小生も数幅所持致居候処家計之都合上売却いたし、只今は一品も無之候。付け石を失ひ当惑之事に候。御一笑可被下候。頓首

七年三月六日

夷山老台座右

光頭

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東海道岩淵、田中光頭、大正七年三月六日。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原夷山様。裏、田中光頭、七年三月十日午前。

【8】大正7年3月18日

一金八拾四円

内、金五円五拾銭引

残金七拾八円五拾銭

右、小切手を以差出申候也。

一半牧水墨山水及奎堂書幅拜見。奎堂は直に返上仕候。半牧は至極佳良と拜見。暫時留置申候。先達而御讓受仕候奎堂之二幅は真に確實に有之候。玆賞仕申候。

此度の方は大概は通り可申と存候得共、小生は感服不仕候。勿々

七年三月十八日

光頭

夷山老台座下

磐溪翁墨菊及愛石墨菊、海莊五古之三幅留置き申候に付代金三十五円別紙小切手にて差出申候間御収手被下度候。
海莊の印によれば丁丑八十翁と有之候。辞書其外には歿年を明治十四年とし八十三とせり。丁丑に八十たることは確實無疑。然らば十四年は八十四歳となるなり。
又印に蓮峰侍史とあり。何か不二の詩に有名の作あるか寡聞未だ知る能わす。伏して高教を乞ふ。南朝古木鎮寒庁之詩は夙に之を知れり。
若し今後右の詩御見当り相成候は、為御見被下度候。勿々

〔封筒〕表、東京麻布区森元町二の九、中行社、杉原幸様。裏、静岡県岩淵、田中光頭、七年三月十八日。

七年三月十日

【9】大正7年4月13日

夷山老台梧下

光頭

磐溪 懸崖菊

天江 同菊

益御満福恭賀之至候。陳者故人手簡之卷御返却被下正に落手仕候。御見せ被下候書画幅之中、

一竹外

返上仕候。

一鉄兜

一鉄石

右三幅購入。

一采蘋

一星巖

一藍田

右三幅は返上仕候。

采蘋は九州第一梅之作者に有之候。如何にも真物と相見え候得とも、とかく試筆之作は面白からぬものに有之候。

星巖は至而拙筆にはあれども草字彙と首引をして草体は大に研究せし人に而正確に有之候。

然に此の中に窮の字有之候処、どふしても窮字とは相読め不申候。藍田は古人の句を出したるものなるに、を捺したるは抱腹之

至也。右之理由により見合せ申候。

藍田
詩画
之印

半牧は此度の分真物に有之候。先達而のは全く贋造に候処、老兄之御保証書添付致し居候に付小家の至宝として永く珍藏可致と存候間此段申上置候。価も此度の分は廉に先頃のは不廉也。亭士凭る之処、る上に硯あり。又下方の左隅に游印あり。右之二点此度には脱漏せり。壬戌六月に同じく画く所のものにして雲泥の差ある。如此呵々。猿も木より落ち、河童も川流の失策を免かれず。精鑑家の夷山先生にして如此事あり。吾曹小天狗聊あんする所ありと謂ふへし。匆々

七年四月十三日

夷山老台座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、静岡県岩淵、田中光顕、七年四月十三日。

【10】大正7年9月7日

ヤ 本間游清

フ 黒沢翁齋

ム 高嶋秋帆

ツ 足代弘訓

マ 梁川星巖

右、為御見被下度候。又御所蔵中の短冊に維新志士有之候は、為御見被下度候。

昨日申進候香坡溪琴等絵而真価御一報相願候也。

七年九月七日

古谿叟

夷山様楮前

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原夷山先生。裏、駿州巖淵、田中青山、七年九月七日。

【11】大正7年9月25日

記

一金十六円 善庵七律

一同十五円 弘庵五絶

青山

一同九十円 奎堂五絶
百廿一円

右、川崎支店小切手を以て差出候間御受取被下度折返し御受領書御遣し被下度候。

一 本年第六号中の弘庵七絶

紙窓烟月朝如空

一同 同号 山中静逸墨梅

一同 御園中渠 墨竹

一 本年第三号中の

一 草場佩川 松

一 安積良斎 七絶

一 立原翠軒 七絶

右之諸幅御持合せに候は、決着の直段を付して一応為御見被下度候也。

七年九月二十五日

古谿叟

夷山老台座下

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原夷山老台、親展。

裏、駿州岩淵、田中光顕、大正七年九月廿五日。

右差出申候也。

夷山様

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、駿河

幅を購求。外三幅は一応御返し申候。

一半牧 水墨山水

【12】 大正7年9月29日

大鵬、天山、錦城、良斎、静逸之五幅為御見被下候処、天山、静逸二

一同 同 双幅
一三樹 五絶

右、何とか御片付被下度、直段は如何様とも御執計被下度候。匆々
七年九月廿九日

古谿叟

夷山様

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、東海

道岩淵、田中光顕、七年九月廿九日。

【13】 大正7年10月19日

記

一金參拾八円 一斎

一同拾五円 天山風霜

一同拾参円 天山今日

一同拾貳円 天山マクリ

一同拾円 天山脩□〔管カ〕

金八拾五円

七年十月十九日

古谿叟

国岩淵、田中光顕、大正七年十月十九日。

【14】 大正8年1月3日

一 弘庵 五絶 万梅園一亭

右、原価七円、表装料六円、箱壹円。

ノ十四円。

此幅は全く小生之劣眼より誤而買取致候訳に付少しも貴社を御恨み不申候。如何様に而も不苦候間片付被下度候也。

大正八年一月三日

夷山様

〔封筒〕 表、杉原夷山様。裏、ノ、田中光顕。

【15】 大正8年3月5日

半牧青緑山水幅

鉄石六言詩幅

右二幅表装至極上出来に有之大に満足致申候。代金失念延引恐悚不啻候。即廿八円川崎支店為替に而差出申候。御落手被下度候也。

大正八年三月五日

夷山老台座下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、東海道岩淵、田中光顕、大正八年三月五日。

【16】 大正8年3月24日

弘庵長篇梅郵歌一幅

右は至極名幅に有之候。代金も不廉に無之大に仕合せ申候。代金延引不相済候。御受取被下度候也。

大正八年三月廿四日

杉原夷山大人座下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東海道岩淵、田中光顕。

【17】 大正(8)年4月11日

御安康恭賀々々。陳者、

イ 金子緑四郎の和歌

右之幅至急当方へ御見せ被下度候。

赤坂区青山南町一ノ三

先達而天山之長篇代十六円差出候処今以御受取書参り不申候。右は書留を以差出候に付間違は無之相届候事に存候。為念御問合に及候也。

四月十一日

田中光顕

夷山老兄座下

〔封筒〕 表、麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、赤坂区青山南町一ノ三、田中光顕。

【18】 大正8年4月15日

一菊池海莊七絶一幅

右、返上。

一金五拾參円也

平教孝和歌一幅

右之代金差出候間御落手被下度候也。

大正八年四月十五日

田中光顕

杉原夷山先生座下

〔封筒〕 表、麻布森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、親展。裏、青

山南町一ノ三、田中光顕。

【19】 大正8年5月11日

拜啓 陳者鮎澤伊太夫先生之短冊表装致度候間何卒極優美の仕立に相願度候。其他岩淵自少々表装御願可致候に付宜布御心配被下度御依頼申上候。先日買取之代金は明日岩淵へ帰り候上差出可申候也。

大正八年五月十一日

田中光顕

杉原先生座下

〔封筒〕 表、麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、赤坂区青山南町一ノ三、田中光顕、大正八年五月十一日。

【20】 大正8年5月14日

一金百〇一円五十銭

右三十六円 香坡

九円 同 小品

三十五円 星巖

十三円 天山半切

八円五十銭 鮎澤短冊

右、小切手を以て差出候間御受取被下度候也。

八年五月十四日

田中

杉原幸様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東海道岩淵、田中光顕、大正八年五月十四日。

【21】 大正8年5月15日

記

○一伴林光平懷紙

○一勝埜臺山書

○一橋本香坡小品

右、一筒に入る。

一藤森弘庵 梅郵歌

一同 天山五絶禪房秋雨歌

一同 天山五律總陸横分地

海道岩淵、田中光顕、八年五月十六夜。

○一茅根寒緑 書

○一金子教孝 和歌

〆八点

右、表装御依頼に及候間中以上の品位に御仕立被下度候。

○印五点は上等に相願候。

先日東京に而鮎澤伊太夫の短冊も相願置申候也。

五月十五日

光顕

夷山様侍史

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光顕、八年五月十五日。

【22】大正8年5月16日

一 秋月悌二郎 長篇 一幅

一 天龍道人 蒲葡 二幅

右、正に落手仕候。

一 叢談第参年の第四号に有之候

天龍之着色猿の幅は最早他へ売却に相成候哉如何。若し今以御手許に

有之候は、一応拝見仕度候。其上にて此度之分も取極可申候也。

八年五月十六夜

光顕

夷山老台様座右

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原夷山様。裏、東

【23】大正8年5月21日

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、封、

東海道岩淵、田中光顕、五月廿一日。

〔註〕封筒のみ。

【24】大正8年5月22日

天龍道人猿之図正に落手買入可申候。叢談中に御掲載之伝を読み大に

感服致候に付三、四幅相求置申度候。第四号に相見え候鵬齋讚之葡萄

及第五号之鶉之図も一応御見せ被下度候。小生之考には此際御贈位之

恩命を被為垂候様致度至願に候。決而御不同意は無之事と存候。頓首

五月廿二日

光顕

夷山老台座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、駿

州岩淵、田中光顕、八年五月廿二日。

【25】大正8年5月26日

記

一 寒緑 五律

一 王瑾 鶉

右、二幅正に落手候也。

一金式拾五円 秋月韋軒 長篇

一同参拾参円 天龍道人 猿

一同七円 同人 墨蒲萄

一同拾四円 同人 鶉淡彩

一同式拾四円 茅根寒緑 五律

金百〇参円

右之通差出候間御受取被下度候也。

大正八年五月廿六日

田中光顕

杉原夷山老台座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、親展。

裏、東海道岩淵、田中光顕、大正八年五月廿六日。

【26】大正8年6月5日

御巡遊御滞なく御帰京大賀之至候。陳者為御見被下候大雅之墨竹は誠に面白きものに有之候。垂涎三尺に候得共勤王家の列にも加へかたく候に付眼を閉ちて見遁がし可申と存候故乍残念返上仕候。

天龍二幅

澹如一幅

右三幅は留め置申候。先日願置候天龍之碑文全篇何卒御見せ被下度候。草々頓首

六月五日

光顕

夷山老台座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、

東海道岩淵、田中光顕、八年六月五日。

【27】大正8年6月9日

會澤正志翁七絶一幅正に落手仕候。如高論能き出来と存候間御譲り受可仕候。茲に妙な事は天龍道人伝御送り被下候に付一覽中之処東京友人より同書巻部差越し呉候。実は老兄より拝借の分為写取可申歟と存し居候際に有之候。非常に仕合せ申候。右に付拝借之分は直に返上可仕候。且又先日以来之代金も直に可差出筈に候得共現今蒲原之別墅に参り居候而小切手帳も岩淵に差置有之候様之事故一兩日御猶予被下度候。

天龍之鷹及山水之出来の宜しきもの御見当り之節は一応為御見被下度候。草々頓首

八年六月九日

光顕

夷山老契机下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿座下。裏、

東海道蒲原駅、田中光顕、大正八年六月九日。

【28】大正8年6月13日

前略

天山勿来関七絶為御見被下深謝之至候。此の詩は昨年一月か二月頃に

貴社より買求候而（九円半にて）表装（七円）も御世話に相成候事有之候に付弊庫中に可有之筈と存じ、頻に昨日已来探し見候得とも得見当り不申候。此度之分は如何程の代価に候哉。一応御示し被下度候。弥見当り不申時は一考可仕候。

天龍道人伝誠に難有候。本日御返し申上候間御受取被下度候。

一 會澤正志翁 七絶 金四十六円

一 菊池教中 同 同八円

一 天龍道人 蒲萄絹本 同七円

一同 同紙本 同五円

四点ノ金六拾六円

右、小切手にて差出候間御受取被下度候也。

八年六月十三日

田中光頭

杉原夷山様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、親展。

裏、東海道岩淵、田中光頭、大正八年六月十三日。

【29】 大正8年6月18日

拜見天山勿閑之詩之事は御垂示之通に可有之と存申候。

一 川路敬斎 七絶 三十九

一 天山 勿来関七絶 廿八

右二幅は買求候。

杏所は出来も宜敷代価も廉に候得共憂国家とか勤王家とか申程の人物

に無之候。先書画家と申丈の事故此際見合せ申候。香坡の墨竹相待居申候。

幕末志士に而永井尚志、筒井政憲、岩瀬忠震、矢部定謙之四人の書画出来の能きもの御所有又は今後御見当相成候は、一応為御見被下度候。表装出来次第御回送相願候也。

六月十八日

田中

夷山様几下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、静

岡県岩淵、田中光頭、大正八年六月十六日。

【30】 大正8年6月21日

一金三十九円 川路敬斎

一同四十三円 香坡墨竹

一同二十八円 天山勿来関

ノ百十円

右、小切手を以差出候間御受取被下度候也。

八年六月廿一日

古谿叟

夷山様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、駿河

国岩淵、田中光頭、大正八年六月廿一日。

【31】 大正8年6月24日

川路七絶出来も見事に有之候得とも汗之字汗に相成居候而展観するに甚面白からず候間返上仕候。御受取被下度候也。

六月廿四日

夷山老台座下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、駿州岩淵、田中光頭、大正八年六月廿四日。

田中

一大窪詩仏 七絶思清

一菅茶山 五絶未見

一佐藤一斎 七絶満城風雨

ノ九幅代価御申越被下度候。

右、御有合に候は、一応為御見被下度候也。

七月三日夜

夷山様

鉄石青緑山水の模写一幅

右、相応の表装御頼申上候也。

此の三幅代金御申越被下度候。西依成斎は御返し申上候。

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原夷山先生座下。

裏、駿州岩淵、田中光頭、八年七月三日夜。

田中

【32】 大正8年7月3日

一岩瀬蟾洲 五絶時哉

一弘庵 七絶抛書

一同 五絶禪房

右御讓受申度候。然に予而御依頼仕置候表装之中に弘庵之禪房秋雨歇之一幅有之候。是は昨年貴社自買入候品に候。此度之分よりは紙の幅狭く候。代は十三円にてありし。

尚外に、

一龍草蘆 七絶千門花落

一篠崎小竹 五律桜井駅

一大槻磐溪 七絶千早城

一大田南畝 五絶美人

一菊池五山 五絶薄暮

一松岡環翠 蓮

【33】 大正8年7月7日

社運御旺盛拵賀之至候。

陳者、

金參拾六円 蟾洲 紫陽花

同拾九円 同 五絶時哉

同拾七円 弘庵 五絶禪房

同拾六円 同 七絶抛書

同廿九円 菅茶山 五絶未見

同貳円五拾銭 環翠 半切蓮

金百拾九円五拾銭

右代金檜物町川崎支店小切手を以差出候間御受取被下度候。

一西依成斎 一行物

一環翠 聯落蓮

一詩仏 七絶

一五山 五絶

一龍公美 七絶

右五幅返上仕候。

天龍道人之鷹御手に入候は、為御見被下度候。

七月七日

夷山様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、東海

道岩淵、田中光頭、八年七月七日。

【34】 大正8年7月19日

十八日之尊翰拜見仕候。

坦庵之菊竹

弘庵之五絶 鶏に八尺龍

右二幅は買求申候間左様御承知被下度候。

一正志斎其外五点之分到着次第取舎相定め代金差出可申候。為其勿々

七月十九日

光頭

夷山老台座下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、駿

州岩淵、田中光頭、八年七月十九日。

【35】 大正8年7月20日

記

一金四十七円 會澤正志 老者云々七律

一同六十三円 江川坦庵 菊竹

一同九円 弘庵五絶 鶏に八尺龍

一同十四円 光平 短冊夢殿は

一同十六円 鉄石 短冊梅月

一同廿三円 半牧 竹石

一同三十五円 香坡 七律渭北江東云々

一同十八円 天龍道人 栗鼠

金式百式拾五円

右之通小切手を以差出候条御受取之上は御一報被下度候也。

大正八年七月廿日

夷山老契座下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉山幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光頭、大正八年七月廿日。

光頭

【36】 大正8年8月4日

前略

一金七拾五円 奎堂 七絶

右、神楽坂川崎小切手を以差出候間御収手可被下候。

一先頃御依頼仕置候表装出来次第御送付被下度候。箱は当方に而製造致候に付此段御承知被下度候。勿々

八月四日

夷山様几下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光頭、大正八年八月四日。

田中

夷山様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、親展。

裏、東海道岩淵、田中光頭、大正八年八月廿五日。

【38】 大正8年9月17日

一香坡題詩 四拾八円

是は所持主は山水も香坡と申候鑑定に候得共、小生は全く別人と断定致候。只、題詩を高価に買取申候。

一藤井藍田は廉価に御譲り被下大慶不過之候。

右にて埋め合せ候積也。

一小山春山三、四円高しと申計にて肝要なる原価御示し無之甚困り申

候。代価てよく買取可致至急御申越被下度候。

右、要用のみ。草々頓首

九月十七日

青山

夷山様

要事のみ申上候。

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、駿

州岩淵、田中光頭、大正八年九月十七日。

【39】 大正8年9月20日

前略

光頭

【37】 大正8年8月25日

天龍道人鷹之名画、殊に廉価に御割愛被下深く感謝仕候。

筒井筑前守書幅御恵投を辱ふし別而御懇志を拝謝仕候。

表装物九幅正に落手至極よろしく出来御礼申述候。

一金壹百拾八円 表装料

一同八円 鉄兜 短冊

一同拾円 敦子 同六投

一同参拾九円 天龍 鷹

右惣計金壹百七拾五円川崎銀行神楽坂支店小切手を以差出候間御受取

被下度候也。

八月廿五日

杉原夷山宛田中光頭書翰紹介(続)

松陰は珍品容易に手に入り不申もの也。正真無疑大慶不過之候。小生

今より五十五、六年以前に松陰の真筆の詩文稿を高杉東行より借り受け
け贍写せし事有之候。十分筆意を呑み込み居候而今以毫も忘れ不申候。

大天狗々々。

一百三十円 松陰額

一四十八円 香坡山水

一四十八円 藍田山水

一四十六円 半牧山水

一四十六円 坦庵七絶

一十円 春山七絶

金三百廿八円

右、小切手を以差出候間御受取被下度候。草々

八年九月二十日

田中

杉原様

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光顕、大正八年九月二十日。

【40】大正8年10月16日

先達而金子も送り又書幅も送り置しに何の御模様も相分り不申、多分

御旅行中かと存じ居候。然に今日書画之報告書出来致候に付御在京之

事と存候申。鉄石青緑山水の模写はまだ出来不申哉。併而御尋申上候也。

十月十六日

杉原様

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、東

海道岩淵、田中光顕、十月十六日。

【41】大正8年11月1日

記

一金 七円 鉄石模写 山水 表装料

一同 廿一円 永井介堂 竹石

一同 八十七円 高秋帆 火技

一同 六十五円 高陶隠居の文

一同 五円五十銭 神波青山詩

金百八拾五円五十銭

右、小切手を以差出候間御受取可被下候。

一鉄石山水は贖物

一川路之詩には孤計式簡所有之殆詩に成らず。

元是布衣鞞帶身

誤依君寵列雜臣

豈思魯使來庭（廷の誤）曰

三位脇章有接寶

一蟾洲は先達而購入之分も有之候に付此度の分は式幅共お返し申候。

一介堂七絶は此度の竹石幸に相求候に付返上仕候。

病中取紛居候。匆略頓首

八年十一月初一

光頭

夷山老兄座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光頭、大正八年十一月一日。

【42】大正8年11月2日

昨日入用之分代金小切手を以差出し不用之分は返上に及置申候。然に
介堂之五律は更に購入之事に致候間代金拾六円五十錢差出申候。宜敷
御聞取可被下候也。

八年十一月二日

光頭

夷山老兄梧下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光頭、大正八年十一月二日。

八十七円

右、差出候間御受取可被下候也。

八年十一月十二日

光頭

中行社

杉原老兄座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光頭、大正八年十一月十一日。

【44】大正8年11月12日

記

一高秋帆 七絶 一溪新滝

一山田空齋 同 淡白輕黄

一頼春水 一行 白雲依静渚

一勝海舟 一行 惟似山猿独

一高秋帆 七絶 両美同胞

右、五幅留置申候。代価御申越可被下候。

一紅蘭 米点山水

一知紀 松竹梅

一秋帆 問是何和

一同 七絶 朝遊碧海

一詩仏 墨竹

一同 書幅

【43】大正8年11月12日

前略

一吉田松陰横幅

右、表装能く出来大に満足致申候。代十九円

一大橋訥庵書幅 代六十五円

一前回之不足金三円

一鳥居甲斐守 七絶

ノ七幅

右、一先御返し申候也。

八年十一月十二日

田中

中行社御中

書添

唯今書画幅十二幅到着いたし申候。十分熟覽之上何分の事可申上候也。

十一月十二日

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光顕、大正八年十一月十二日。

【45】大正8年11月24日

記

一金參拾參円 春水一行物

一同六拾五円 秋帆七絶 一溪新滝

一同式拾七円 空齋七絶 淡白輕黄

一同八円五拾錢 海舟一行物

一同六拾四円 秋帆七絶 兩美同胞

一同式拾參円 矢部定謙 親

一同七円五拾錢 香坡小君

ノ八点金貳百貳拾九円

右、小切手差出候間御受取被下度候也。

八年十一月廿四日

杉原様

田中

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光顕、八年十一月廿四日。

【46】大正8年11月28日

一羽倉外記其外八幅御送付被下正に落掌致申候。悉皆購求之事に可仕候。代金者跡自差出可申候。

一河野鉄兜山水之幅御有合に候は、為御見被下度候。

一随鴟吟社 麻布区仲の町十一番地

右之処にて発行之随鴟集百十一号之卷末広告に、

藤田幽谷尺牘 卷物 重野成斎博士旧辞 代金參拾円

と相見え申候。是は真物か否御一覽之上宜敷候は、御買取之上御回付被下度候。小生自佐藤六石へ申遣候而も宜敷候得共贖物之時には甚困り候間御依頼及候。勿々

十一月廿八日

光顕

杉^マ夷山老台梧下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光顕、大正八年十一月廿八日。

【47】 大正8年12月3日

一 玉揚其外共九幅代百八拾六円

此度之分

一 星巖七絶 代四十八円

二 二合計金貳百參拾四円

右、小切手を以差出申候。御受取被下度候。

一 秋帆七絶 蛩尾孤光

一 槐堂画 枯蘆解虫

右、二幅者返上仕候。

一 箱三個正に落手仕候。

八年十二月三日

田中

杉原様

〔封筒〕 表、東京市麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、

駿州岩淵、田中光顕、大正八年十二月三日。

【48】 大正8年12月14日

御多忙拝察仕候。陳者書画叢談三ヶ年分を此度製本に致候積にて取調

見候処第二年の第十二号と第三年の第二号との二冊見当り不申候。御

配送を受けたに相違無之候得共、どこかへ仕舞候か、闕本に相成甚残

念に付御有合せに候は、右二冊丈け御惠贈被下度御願申上候。

一 佐久間象山手紙一通

一 野中兼山手紙一通

右、巻物に表装致度候間牙軸繻珍仕立見返しは金砂子にして至急御調
成被下度御依頼に及候。来一月に至り候は、書画類表潢御依頼申度候
間此段前以申上置候也。

八年十二月十四日

光顕

夷山老兄座下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、親展。

裏、東海道岩淵、田中光顕、大正八年十二月十四日。

【49】 大正8年12月16日

八幅御送り被下深謝之至候。中に就き四幅購求仕候。

一 佐藤尚中 一行物 4

一 藤田呉江 竹石 9

一 橋本香坡 小品 13

一 林鶴梁 五絶 27

右、代金五拾參円也。

一 春岳公 七絶

不関世事是非事。

○事は上と改めたし。展観して面白からず。

一 林復齋 七絶

軍十万

平の処也。南朝四百八十寺の例はあれとも復齋位には通用しがたし。

一 小原鉄心

一池大雅堂

右、瑕瑾はなけれども面白からず。故に四幅返上仕候也。

大正八年十二月十六日

田中

杉原様

小切手にて代金封入差出申候也。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東

海道岩淵、田中光顕、大正八年十二月十六日。

【50】大正8年12月18日

略啓 陳者天龍道人画蒲萄に鷹之図及半牧処士墨竹之二幅正に落手仕候。

天龍道人事迹考六十九頁に、

贈草龍子 好画学蒲桃於余故以草龍之号与・

と有之。落款に天龍草龍子とあり。印は

天龍道人

田輝

とあり。王

瑾の没後に天龍道人の称を襲きしものかと思はる。能々御研究相成度候。天狗の鼻一捻、仍而如件。

半牧は無論留め置申候。草龍子は返上仕候也。

十二月十八日

古谿叟

夷山人様

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、

東海道岩淵、田中光顕、大正八年十二月十八日。

【51】大正8年12月25日

一金四拾参円也

村山半牧 墨竹 一幅代

右、小切手を以差出候間御受取可被下候也。

大正八年十二月廿五日

田中光顕

杉原先生侍史

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、東

海道岩淵、田中光顕、大正八年十二月廿五日。

【52】大正8年12月26日

御送付之生娘四人共別品に有之、早速側室に召抱申候。別紙小切手百

〇式円差出申候。御受領被下度候也。

八年十二月廿六日

光顕

夷山先生梧下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様、親展。

裏、静岡県岩淵、田中光顕、八年十二月廿六日。

【53】大正9年1月7日

新禧万福 益御壮健珍重之至候。陳は別紙三幀差出候間何卒坂本龍馬

の佐々木宛手紙は極上等之横幅に、香坡は中等に、鏡水は下等にて不苦候間、至急御取計相願候。先達而之兼山と象山との分出来次第御送り被下度候也。

九年一月七日

夷山老台座下

一金廿六円 方谷

一同三十八円 紅蘭

一同廿四円 知紀

一同十四円 朗蘆

金九十八円 内五円残金の分引

残金九十四円跡自差出可申候。

一八田知紀之一幅は返上之筈。

九年一月七日

光頭

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、静

岡県岩淵、田中光頭、大正九年一月七日。

【54】大正9年1月10日

拝呈

一金貳拾円 八田知紀 竹白画賛

一同貳拾六円 山田方谷 五古

一同拾四円 坂谷朗蘆 書

青山

三点合計金九拾四円（九拾八円の処五円引）
右、小切手を以差出候条御落手被下度候也。

大正九年一月十日

夷山老賢兄座下

書画叢談第三年号第二冊正に拝受仕候也。先日相願置候坂本龍馬手紙は持主自慾張り候事申来るに付返却之積に付直に御返付被下度御願申上候。御手数之至恐入候。拝

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、封、

東海道岩淵、田中光頭、大正九年一月十日。

【55】大正9年1月21日

訥庵、介堂之二幅御見せ被下深謝之至候。二幅とも予而御世話被下候分に比すれば少々下り候間返上仕候。何か他に尤物も御見出し相成候は、拝覽を望み申候也。

一月廿一日

光頭

夷山老台梧下

坂本龍馬の手紙正に受取申候也。

〔封筒〕表、東京麻布森元町一ノ九、杉原幸殿、親展。裏、
海道岩淵、田中光頭、一月廿一日。

光頭

【56】 大正9年2月3日

半牧夏山、高隠之山水画幅、代金六拾貳円、別紙小切手を以差出候間御受取被下度候也。

九年二月三日

夷山様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、親展。

裏、東海道岩淵、田中光顕、大正九年二月三日。

青山

九年三月廿六日

夷山老台座下

尚々 手代木勝任の斜九羅咲の一幅、谷口靄山の松鶴の幅
右、御有合あらば一覽を乞ふ。

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東海道岩淵、田中光顕、大正九年三月廿六日。

【58】 大正9年4月2日

秃野人之五絶は購入之事に仕候。春山は真物に有之候得共先生誤而寢字を□「穴かんむりに、寢」という文字からう冠をとつたものを組み合わせた誤字」に書きかゝ、而展覧上甚不愉快也。蔣塘は珍品になれとも賞するに足る程のものにも無之先年買入候半香の山水之讚もある故右之二幅は先見合申候。春山も先年一幅買入申候也。何か勤王家の尤物出で候は、為御見可被下候。草々

四月二日

光顕

夷山老兄梧下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様。裏、静

岡県岩淵、田中光顕、大正九年四月二日。

【57】 大正9年3月26日

表装が余り長くなると矮屋の床には懸り申間敷と憂慮致し居申候。実ハ数十幅御依頼仕度もの有之候に付今少し早く御願申上度候。

一金六拾四円 半牧 山水

一同四拾四円 東澤瀉 四君子

一同拾壹円 広澤安任 古詩

一同拾八円 中島棕隠 詠竹夫人之詩

一同八円 館柳湾 七絶

一同拾八円 大鳥圭介 七絶

一同拾四円 菊池海蔵 五絶

一同拾六円 五代友厚 竹

〆金百九拾参円也。

右、川崎支店小切手に而差出候間御落手之上は直に御受領書御送り被下度候。又返上之書画幅も同様御受取書を相願候也。

【59】 大正9年4月18日

一金廿七円 太乙 山水

一同拾参円 摩斎 七絶

一同四円五拾銭 鑾溪 書

〆金四拾四円五拾銭

右、小切手差出候間御取手之上御受領書御遣し被下度候也。

九年四月十八日

光頭

夷山様凡右

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿。裏、東海道岩淵、田中光頭、大正九年四月十八日。

【60】 大正9年6月12日

旅行中支払大に延引恐縮之外無之候。別紙四十八円御受取被下度候。鏡水は土佐之謹学者にて小竹門人也。決而御心配に不及候。只友人の所持せしものを所望いたし候品に付少々都合不宜候。勤王家之小品に而も御見当候節御弁償に而も被下候は、大幸之至候也。

九年六月十二日

青山

夷山様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、親展。

裏、静岡県岩淵、田中光頭、九年六月十三日。

【61】 大正9年7月12日

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸様、親展。

杉原夷山宛田中光頭書翰紹介(続)

裏、東海道岩淵、田中光頭、大正九年七月十二日。

〔註〕 封筒のみ、本文なし。

【62】 () () 年5月20日

〔封筒〕 表、東京市麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿行。裏、東海道岩淵、田中光頭出、五月廿日。

〔註〕 封筒のみ、本文なし。

【63】 大正11年3月20日付葉書

〔表〕 東京麻布区森元町一ノ九、中行社、杉原幸殿、東海道岩淵、田中光頭、三月廿日。

〔裏〕 伊藤藍田 七絶 豊嶋学洲 長文

橋本香坡 紙雛 木南華 水墨山水

右、四品為御見被下度代価も御通知被下度候也。

近来御無音申上候。定而筆硯御健全と存候。匆々頓首

十一年三月廿日東海道岩淵

田中光頭

【64】 大正7年1月18日付電報

アザブクモリモトテウ一ノ九チウコウシヤ

タナカ

三ブクツイタ カウ バイカンノサンスイト ナンザンノホウケンモ

オクレ

〔発信局〕 イワブチ

【65】 大正（8）年1月1日

己未元旦

喜字翁光頭

よろこひの文字の齡のとしたちてうれしくあふく不二の神山

〔封筒〕 なし。